

第4章 チームワーク

キャプテン谷口にとって最後の地区大会、初戦はからくも2対1で勝利した。しかし二回戦の組み合わせがいつもきまって決勝に進出している金成中に決まってしまった。

4・1 野球部の練習中

丸井「キャ、キャプテンちょっと…。」

谷口「なんだ？」

丸井「それがないへんなことになりましたよ。あ、あのおどろかないでください。第二戦のあいてなんスが……」

谷口「じゃ…、じょうだんじゃない……」

松下「どうかしたのか丸井？」

丸井「第二戦に金成中とあたるんスよ。」

松下「えっ、ほんとかそれ！」

小山「二戦までとは……、ついてないなおれたち。」

谷口「……」

松下「丸井、ざんねんだったな、せっかくグローブを買ったっていうのに。」

谷口「丸井、一年生をあつめてくれ。」

丸井「は…はいっ。」

谷口「レギュラーになりたい者はまえにでろ！ テストをする。」

一年生A「お、おいレギュラーだってさ。」

一年生B「う、うん。」

イガラシ「そうこなくっちゃ！」

一年生A「お、おれもようかな、どうせダメだけど。」

一年生C「お、おれも。」

一年生D「じゃぼくもついでにでちゃおうかなーっと。」

二、三年生の部員はそのようすをにらむようにじっと見つめていた。

一年生C「や、やっぱりやめとこ。」

一年生A「ぼくも……」

一年生D「エヘヘ、アハ……」

イガラシ「やれやれ、どうもこいつもビクビクしやがって！」

谷口「イガラシだけか……、ま、いいだろう。まずバッティングからだ。松下投げてくれ。さあみんなも守備について。」

松下「なんだ、なんだ、おまえたち、おれが打たれるとおもってんのかよ！」

島田「それもそうだな。」

遠藤「わりい、わりい。」

谷口「よし、はじめっ！」

松下「ふふ…一年生ごときにおれのタマが打てるとおもってんのか。」

ピッチャーの松下は自信をもってイガラシにむかってボールを投げはじめの다가……。カーン。

松下「あ…」

一年生B「すっごいセンターオーバーだ！」

一年生C「それもライナーでフェンスにぶつけちゃって。」

カーン、カーン、カーン。イガラシは松下の投げるボールをことごとくバットのしんにあてうしかえした。

松下「はあ、ふう、はあ、ふう…」

イガラシ「もう、いいんじゃないですか…」

谷口「よ、よしつぎは守備だ。得意なポジションはどこなんだ。」

イガラシ「得意っていわれても、よわったな……」

谷口「な、ないのか。」

イガラシ「いえ、ひととおり全部やってきたもんで。」

一年生A「ぜんぶだつてさ、すっごい！」

イガラシ「ま、しいていえば内野かなあ。」

谷口「よし、じゃあやってみろ。」

谷口がノックしての守備練習がはじまった。イガラシはここでもすばらしい守備をみせた。

谷口「ようし、そこまで！」

イガラシ「どうです、レギュラーになれますかね？」

谷口「もちろんだとも。」

イガラシ「でもいいんですか…」

イガラシがゆびさした方には二、三年生のレギュラーがにらみつけるようにして見つめている姿があった。

谷口「そんなこといつてられる場合じゃない。」

イガラシ「ヘーッ。」

4・2 谷口の家で

谷口はイガラシをレギュラーにするために、だれをレギュラーからはずそうか一人なやんでいる。

父「タカ、なん時だとおもってたんだ、いいかげんにねえか。」

谷口「う、うん。」

父「しんこくな顔しやがって、いってえなにをやってたんだ。」

谷口「ひとりうまいのがいて、第二戦につかいたんだけど……だれをおろすかまよっているんだ。」

父「みんなにたりよったりなのか？」

谷口「実力からいえばはつきりしているんだけど……」

父「じゃ、なにも考えることはねえだろう。」

谷口「でも……レギュラーからはずされる本人の気持ちになると…」

父「なにいつてんだ、なにしろ試合にかたなけりゃならないんだろう。」

谷口「そりゃ……」

父「人の上にたちやそういうこともあるさ、そこがキャプテンのつらいところよ。」

谷口「……」

4・3 次の日の練習

グラウンドに部員全員をあつめてメンバーの変更がつけられようとしている。昨晚おそくまで考えたためか谷口の目が赤い。丸井はそのことに気がついていた。

谷口「第二戦にそなえてオーダーを一部変更する。」

部員「……」

谷口「丸井のかわりにセカンドをイガラシに守ってもらう！」

丸井「え…」
部員「……」

丸井「いいんだ、どうせぼくがいちばんへたっぴいなんだから……。どうせこうなるとおもっていたんだ。」

谷口「さあ、みんな守備につけ！」

イガラシ「オーライ、セカンドはまかしといてください。」

ナインはベンチにさがった丸井のことが気になって練習に集中できない。

谷口がノック役で守備練習がはじまった。

イガラシだけが大きなこえをだして元気にプレーしている。

谷口「いくぞ！ ショート！」

高木「オ、オウ…」

ショート高木とセカンドイガラシとのダブルプレイ練習がはじまったが高木のイガラシに対する送球がややそれたタマになってしまう。

谷口「ショート！ 送球がわるいぞ！ もういっちょ！」

高木「オ、オウ…」

今度も高木のイガラシに対する送球はややそれてしまった。

イガラシ「ちよつとう、このへんに投げてもらえませんか。ファーストへの送球がワンテンポおくれますからね。」

高木「う…」

イガラシは胸をおさえながら高木に向かっていった。

谷口「もういっちょ！」

ショート高木はゴロをはじいてしまう。セカンドイガラシがそのはじかれたタマをバックアップしてセカンドに送球しようとするがセカンドにはだれもない…

イガラシ「どうしたのセカンドにはいつてよ！ ぼくがカバーしたときはショートがはいってくんなくちゃ。」

イガラシ「まったく野球をしってんのかね！」

高木「く…こ、この一っ！」

セカンドに戻ろうとしながらイガラシはひとりごとのようにつぶやいたことばにショート高木はイガラシをうしろからおしたおしてなぐりはじめた。

谷口「な、なにをするんだ。」

遠藤「あーあー…」

谷口「練習中に暴力をふるうとはなにごとだ！」

高木「だ、だってこいつ一年生のくせにナマイキなことばかりいつて…」

谷口「プレイ中には先輩も後輩もない！」

高木「くっ…」

谷口「第二戦も近いというのにダメじゃないか！」

高木「はい。」

谷口「さあみんなも練習だ、練習だ！」

もめごとがあったがナインは練習を開始した。そんな練習風景を見ることなくベンチにはうなだれてすわっている丸井の姿があった。

4・4 練習後部室前の手洗い場で

小山「はーっさっぱりした。」
 島田「くたびれたなあ。」
 松下「それより腹がへって死にそうだよ。」
 加藤「丸井、なにつたつたってんだよ、はやくあらえよ。」
 丸井「い、いいんだ、ぼくなんかあとで…」

そういつて丸井は一人さきに部室の中はいってしまった。

松下「かわいそうに、すっかり気をおとしちゃってよ……」
 島田「まったくなあ……」
 加藤「しかしキャプテンもちょっとめたかないか。そりゃ金成中が強いってんでイガラシをレギュラーにいたのはわかるよ、でも丸井はどうなるんだ。セカンドを守るためにこの半年間、一生懸命練習に練習をかさねてきたっていうのによ。」
 島田「そういや、グローブまで新調したっけな……」
 加藤「いくら勝ちたいからって、おれはキャプテンのやりかたには反対だな。」
 小山「そうだな……」
 松下「おれも気にいらないね。」
 加藤「みんなでキャプテンに抗議しようじゃないか。」
 島田「うむ…賛成だ。」
 松下「よし、いこういこう。」

そのとき部室のドアがあいた。

松下「丸井……」
 丸井「みんなキャプテンのことをなんだとおもってんだ、かんたんに抗議だなんてきめちゃっているけど、キャプテンだってよく考えて決定したことなんだぞ。」
 島田「そりゃそうだろうとおもうけど……、いいのかおまえ。」

丸井「いいわけないだろ、そりゃおれだってレギュラーでいたいし試合にだつてでたいよ、しかしキャプテンになつてくれとたのんだのはおれたちみんなじゃないか、そのキャプテンを信じられないのかよ。」

部員「……」

そのときグラウンドからイガラシがやってきて部室の中にはいるうとしていた。

イガラシ「丸井さんて、いい人なんだね。」
 丸井「う、うるせえ！ てめえなんてだいつきらいだ！ あっちにいけ！」

イガラシは部室のドアをボタンとじた。
 キャプテンの谷口は部室の陰で部員のようすを見まもっていた。谷口はばらばらになりかけたナインの心をひきとめた丸井に感謝するとともに、レギュラーからはずされた丸井のためにも第二戦の勝利をちかうのであった。



4・5 金成中のデータ野球

試合前だというのに金成中はなにやら新しくレギュラー入りしたイガラシの性格を調べている。試合前の金成中のベンチの中では……

「かれは、短気ですね。」

「しかし、試合直前にメンバーをかえるなんて不安定なチームですね。」

「それに、あんなチビにそれほど実力があるとはおもえないけどなあ。」

「かってなこと言わないでください、あの決断力に欠ける谷口がナインの反対をおしきって起用したのですよ！」

金成中のノートにはぎっしり墨谷ナインの特徴が書いてあった。

谷口「いいか、敵は地区予選でいつも決勝に顔をだしている金成中だ、負けてもともと、胸をかりるつもりでもおもしろいぶつかっていいこう。」

部員「オウ！」

金成中との試合がはじまった。先攻は墨谷、一番ショート高木、ピッチャー松下、そしてこの試合から丸井にかわって出場しているセカンドイガラシ、三人ともいいあたりをするが金成中の好守備もあって三者凡退にしりぞけられる。

その裏今度は金成中の攻撃である。ミートを主体にした確実な攻撃で1点を先制するが谷口、イガラシ、加藤とわたるダブルプレイでピンチをきりぬけた。

金成中の攻撃は守備の華麗さとはまるで逆であった。ランナーが一塁にいればバントでセカンドに送り、それをなんとかものにするという地味だが確実な点のとりかたをした。いっぽう墨谷二中のバッティングは目をみはるようなあたりばかりだった。しかしその攻撃も金成中のすばらしい守備にまったくはばまれていた。

七回まですすんで5対1と金成リードで墨谷の攻撃をむかえた。金成中は墨谷二中を徹底的に調べ、わざと相手の好きなコースにボールを投げ、たとえいいあたりをされても前もって守備の位置を動かしておきアウトにするという作戦だった。

島田「キャプテン、どこに打つたらいいんですか、おれ、頭いたくなってきた。」

谷口「そうだな……おまえはセンターまえにかえすのがとくいだから……」

小山「セーフティバントはどうでしょう！」

加藤「それより内野の頭をこすってのは……」

谷口「みんなためしてみたじゃないか、うーんなんかいいアイデアがないかなあ。
うーん……」

小山「うーん……」

加藤「ああすればこうくる……」

谷口「ちよつとまで、おれたちさつきからいったいなにをやってるんだ、野球をやっているんだぞ、野球をっ！」

小山「……」

島田「……」

小山「そういやあ、まるでクイズかつめ将棋をやっているみたいだな。」

加藤「ほんと、おれ頭がかゆくなっちゃったよ。」

谷口「もう小細工なんかやめておれたちの野球をやろう、おもしろい打って、おもしろい走り、それで負けるのならしかたないじゃないか。」

イガラシ「そうこなくっちゃ！」

松下「しかし、おれたちが細工をするまえだってあのいいタマをおもしろいふつてたんですよ。」

島田「そうですよ、それが打つとこ、打つとこあつまってきたさ……」

谷口「だったら、それいじょうの打球でこたえてやろうじゃないか。」

島田「しかし……」

谷口「いまさらあわてて策をたてたって、むこうは策にかけちゃ一枚も二枚もうわてなんだ。ズルズルとむこうのペースにまきこまれるだけだ。」

小山「それもそうだな。」

島田「金成のベースにひきづられて、墨谷ほんらいの野球をわすれるなんておれたちもだらしがなかったな。」

松下「ようし、いっちょおれたちの野球をやったろうじゃないか！」

部員「オウ！」

島田「やるぞ、くそっ！」

守備位置を相手が変わってくるので作戦をいろいろ変えた墨谷だったが、谷口のことばで守備位置を意識しないで打つ作戦にもどった。島田はいいあたりをするもセンターフライ、加藤もライトフライに終わった。アウトになるたびに金成中ベンチからは「ナイスバッティング！」という声と笑い声、そして拍手。ナインはくやくしくてくやくしくてたまらない思いをする。とうとう松下はベンチにあったバケツをおもいっきり投げてしまった。

高木「おい、ものにあたりちらすのはよせよ。みじめさをさらけただけだぜ…」

松下「なにい…」

谷口「やめろよ。」

イガラシ「くそう…、もう、あ、あの連中ぶんなぐってやるっ！」

丸井「おいイガラシ、なんのためにおれとレギュラーをかわったんだ、ケンカをするためかっ！」

イガラシ「……」

丸井「そんなにくやくしかったら、くやくさをそのままボールにたたきつけろよ！」

イガラシ「す、すいません。」

浅間「くやくしかったら、ボールにたたきつけろ…か、ようしこいつ！」

しかし浅間のあたりももう少しでヒットになりそうになるが好守備でアウトとなる。やはり金成中からは「ナイスバッティング！」という声が墨谷ベンチにかかる。

4・6 静かな墨谷ベンチ

そして九回をむかえた。得点は6対1で金成中リード。墨谷ベンチはしずまりかえっていた、それはあきらめのためでなく、くやくさのためにだれひとりとして口がきけなかったのである。先頭のショート高木は金成が予想した守備位置をもうすこしでぬけそうだったが取られてしまった。だがだんだんと打球がのびてきた。

次の松下もバットをおもいつきりふった。墨谷応援席から歓声があがる。相手が予想してた位置よりもふかく、ボールはライナーでとび二塁打となった。さらにイガラシ、谷口とつづく……

イガラシ「ようし、みてろ…丸井さんのためにもぜったい打つ！ さっ、こい！」

「カーン！」

イガラシの打球はライナーでフェンスにぶつかり二塁打となった。

谷口「つづくぞ！ イガラシッ！」

「カーン！」

打球にのびのできた墨谷二中のバッティングはすさまじかった。金成中の守備位置の移動がかえって墨谷二中に屈辱をあたえて、墨谷ナインを爆発させてしまったのである。守備位置の移動だけではかりしれない力のおそろしさによりやく金成中は気がついたが、もはや時おそく墨谷二中のあいではなかった。